

City Museum Letter

Vol.2

焼津市歴史民俗資料館 焼津小泉八雲記念館



やまどんと行く

お散歩文化財

Vol. 3

焼津の三右衛門新田地区（大富学区）にある、三右衛門新田八幡宮さんを紹介するよ！

150号バイパスを大井川方面に向かって黒石川を越えて少し行った先を左に入った住宅街。三右衛門新田地区公会堂の横にひっそりと佇むお社があるよ。



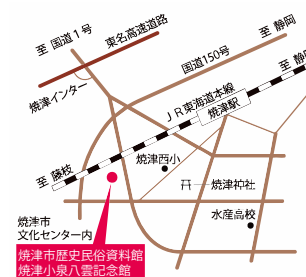
三右衛門新田の由来

三右衛門新田は、今から400年ほど前の江戸時代に出来たと言われているんだ。地区名の「三右衛門」は、実はこの地区を開拓した人の名前なんだよ。この三右衛門さんは、神仏への信仰心が厚い人で、お寺を建てたり神社に寄進したりするなど徳のある人だったんだ。だから、地区の名前になったと言われているんだ。

八幡宮は、創建年ははっきりしていないんだけど、江戸時代の終わりころには、三右衛門新田に祀られていたんだよ。御祭神は、必勝祈願の神様として信仰を集める品陀別命なんだ。

三右衛門新田の芋祭り

この三右衛門新田には珍しいお祭りがあるんだよ！それが、『三右衛門新田の芋祭り』。三右衛門芋（里芋）が取れる9月上旬ごろに行われるお祭りなんだ。土地の神様に感謝して三右衛門で取れる三右衛門芋を煮て串にさしてお社に奉納するお祭りだよ！これは、焼津の三右衛門新田でしか栽培されていないお芋なんだ！その昔、凶作で食べ物が採れない時、



@YAIJU.HEARN.REKI.MUSEUM

【発行・問合せ】

焼津市生きがい・交流部文化振興課 資料館担当
〒425-0071 静岡県焼津市三ヶ名1550
☎ 054-629-6847

表紙写真：浜通り（帆や前）
引用参考文献：小泉節子・小泉一雄著『小泉八雲 思い出の記 父「八雲」を憶う』（樹叢文社 1976年発行 / 村松眞一訳注者『LARCADIO HEARN AT YAIJU 対訳・焼津の八雲名作集』静岡新聞社 2007年発行



里芋だけが育ってみんなを救ったってお話があるんだよ！今でも毎年地元の人たちが、お祭りを行っているんだよ！



【次回企画展予告】
市制施行75周年記念企画展
「やまむらともよが描く 焼津の!!」
——「くんとやまどんの歴史探検」——
開催日…令和8年6月7日(日)
時間…9時～17時
場所…焼津市歴史民俗資料館
入場料…無料



焼津市歴史民俗資料館では『おいしい焼津 第二部「食」は一日にしてならず』と題して特別展を開催中。海の幸だけではなく、焼津の『食』と『食のルーツ』を辿ってみてはいかがでしょうか？

八雲さんと焼津の食！



焼

津ゆかりの文豪「小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）。東京に在住中6度の夏をここ焼津市で過ごしました。

彼が夏のバカンスで来ていたこの地で、当時の人々は何を食していたのでしょうか？
八雲さんの著書や長男一雄さんの著書『父「八雲」を憶う』から紐解いていきましょう！



HEESO

「へそ」と聞いて何を思い浮かべますか？
焼津では「へそ」とは、カツオ・マグロの心臓のことを言います。現在焼津でよく出回っているのはカツオの心臓のようです。
食べ方としては、煮つけ・おでん・フライ・焼いたりします。
八雲さんは長男一雄さんとマグロのヘソを食べたようです。

「へへーい、あれかね。あれは鮪の臍へそでございますウ」といつて、今引き揚げられた一尾の腹中からそれを撮み出し、海中でジャブジャブと洗って「へい如何？薬ですだでおあがなすって・・・」と鼻先へ差出してくれました。さすがに父も私もそれを食う気にはなれませんでした。しかしこの日宿へ帰ってから、これを幾つも串に刺して焼いたのを乙吉さんは私等の膳に添えてくれましたが、ちよつと牛肉に似た味のする美味いものでした。父も「大層結構です」と賞味しました。

小泉一雄著 『父「八雲」を憶う』より

―ある朝、彼は私を店へ呼び入れて、すばらしいホウボウ（魴鰯）をみせてくれた……読者は、何かホウボウに似たものを御覧になったことがあるかどうか。（中略）「それ食べられるかね」と私は聞いた。
「へー」と乙吉は答えた。「これを先生さまの御食事につけましょう。」

小泉八雲著 『乙吉だるま』より

（対訳・焼津の八雲名作集 村松眞一 編訳注）



現在の焼津ではまれに、スーパーの鮮魚コーナーに現れるホウボウです。お刺身や煮つけなどにして食べます。
八雲さんの作品の中では、調理方法は書かれていないので、どんな調理方法で食べたのか気になるところです！

HOUNBOU

RAMUNE

和田のラムネと言いますが、現在の水天宮から海に向かって橋を越えたたもとにあった「小川屋」さんで売っていた、ラムネです。当時はまだ、この辺りは和田村でした。現在この小川屋さんはお店を閉めてしまいました。

―和田には一軒乙吉さんの知合の掛茶屋があり、ここでも休ませて貰いました。真夏の太陽が照り付ける浜路伝いに一里余の道程を飛蝗を捕えたり蜻蛉を追っ駆けたり蟹を押えたりしながらようやく和田に着いて、この茶店で飲む冷い玉ラムネは実に泣き出したいほどの美味でした。

小泉一雄著 『父「八雲」を憶う』より

UNAGI

八雲さんたちが乙吉さんの案内で通った浜当目の鰻屋は、かつて瀬戸川近くにあり、一雄さんはそこで一日を過ごした思い出を書き残しています。



―瀬戸川で、よく鰻が捕れました。いつぞや小猫を買って行った鰻商人の家もこの川の辺にあるのでした。これとは別ですが同じ川岸に一軒鰻料理専門店の小料理屋がありました。この家の主人と乙吉さんとは昵懇でしたので、乙吉さんは時々父の一行をここへ案内してくれました。

小泉一雄著 『父「八雲」を憶う』より